









坊主も老いものより進まぬ  
 土の餅つく神事おまへし  
 生簀子極付りし市に多宝  
 の管を結つ松りきり可け  
 吉白丸地おへ食とつふむけ  
 ふうふう鳥をよこしう眼糸  
 舌根子念佛を度ふ居士衣  
 小珠ハ綿の中には何れも  
 杖を歩せ路々破上りあり  
 膝行不伝や姨捨の月  
 夏切子坊根銭うろ嵐右  
 陽冷せぬお物か下しき

霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜

名の夏も柴子の尺護りまき  
 川のみのうつし桶の名を取  
 柴垣の古ふおハ破まきり  
 後とまんしう杖はらりし  
 季よりよとのひしをる秋の風  
 髪きり音れ月了ひめく  
 長門より西の嶽お根回し  
 粥子玉子お何と喰しん  
 山多むの海名も他柄棧  
 ちりり鶴をくノ貴り了  
 やろせん大江の岸ハ八行  
 削りぬし木家の差

霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜 霜



沙謀及とや河瀬のぬきのかた  
巨跡の枝子神も霞つく  
花くまの籠も物もさうさ  
清こみ (と) 田舎 渡つた  
霜 霜 雪

陽炎の赤肩子に一つ紙衣の  
水初る可なりけし一室の音  
松のたまり宿話のゆへ物あつた  
あまうらゝを火子猿の海可け  
うらゝの目し名初る物さう  
うらゝもかゝる物さう秋  
霜 良 此筋 塔山 曾良 霜

萩原ハ衣初るゆへとて面白  
柄さうさうの物初るの初め  
玉内中し小神の縁も初め  
あまうらゝを火子猿の海可け  
うらゝの目し名初る物さう  
うらゝもかゝる物さう秋  
霜 良 此筋 塔山 曾良 霜











昔の葉ハ猿の涙や後修らん  
 夕を味く 休人 柴うら  
 夕よ又新りをおも石の上  
 展付くきく只のすつ舟  
 真すちと叶えかゝる杜宇  
 かたはりの光も投る丸葉  
 花のたの波ををきぬ 蛇をこ  
 ぬさくといひて火燈をす  
 一書  
 夕も又新りをおも石の上  
 末とよちうけ流のきく浪  
 旗のみれおこころしく  
 篇  
 二寸  
 曾良  
 里  
 篇  
 良  
 梅  
 雪  
 撰  
 書

ねくの風程を物干しきつ  
 流し一ふり師を花のあま  
 際生くれくまのつこもり  
 翅輪  
 秋鴉  
 桃里

四月廿二日

風流のけめわたくの何植歌  
 夜多るを折てあまけ子  
 水と記て屋木の石やまきん  
 露子 味のあういさすき  
 一葉 月と星あふ川 柳  
 住工 庭根ふく村さ 秋あつ  
 妹の女の上縁と御子まを酌て  
 篇  
 良  
 明  
 翁  
 篇



女成るものやとほむる物  
ある時ハ増えも言方の入ぬるむ  
樽の小枝子、まきを濁る  
くみみてハ妹、島の足も悟り  
常陸一山や白雲おとけ  
酒より八軍を送る軍、本こ  
秋を走る方と物よこし信  
文、秋の登つ不破の麻の角  
島のお伽の位ふささ月  
いろくしの形もあはさるあて  
也一き骨もはさく糸お  
山多死屍をく手やむらうん

解良翁 解良翁 解良翁 解良翁 解良翁

芥 堀さう) 信あつめ、ふ  
新ひくを年一筋の法ありて  
村のく(式士のあはれを  
華とくぬまのあまのそふ  
字より互に、くあはれを  
多枝子、わさふ財をき入  
何中、事、はたぬ七又  
位多る、宿のね、は、自を足よ  
す、まき、希、む、お、あ、の、あ  
切、櫓、枝、く、く、に、く、あ、し  
左、山、鶴、の、あ、く、く、く、く、  
集、さ、や、ほ、ち、く、く、く、く、

解良翁 解良翁 解良翁 解良翁 解良翁



教生石花にふくしつゝあ  
るをききしり遊ひをききや  
酒の中へいひのききつき風  
ふしのほろろ人の正月も  
春陽すゝかめり少細るさあ

良翁 翁 良翁

素門可伸の如く 素門可伸の如く  
むすし

翁

かく好むや月之ぬ花を軒の  
すれり 春はこころの  
きり崩す山は折れ居るさ  
畔 休いすゝ石の 楠く

栗庵 翁 曾良

把く 吉原の月夜の  
秋走つゝ魚は鱈屋とあれは  
梓弓矢の羽は家をかきさ  
新書もよみ 曉の 春  
松留余は吹鶴つゝ 春の  
酒の遠恨をいふ 海ありし  
聲入ハ 浪のゆかき 柳ま  
されて おくれ 春情の  
夏 月を新しき 柳ま  
月のひらき 心ゆく 尺の  
宿 月海魚釣る 月海  
笠の端をすゝ 春の 柳

等雲 次平 素景 翁 高 翁 良 翁 竿 葉 翁 高



梅子もろく秘蔵やよゆかしの時  
 かきつたる苦み証被あしし  
 三つにまを志しすもあや  
 ちゆりなれぬ悪敷きくま  
 まご野良のむくまの美しく  
 かへんし一葉の縁や重くふ  
 うもわのまきくくたつたの年  
 杯をもろく市井酒酔  
 の傍り三杯の流をくくちや  
 張る合申しハめらうのう  
 物子あるまの酔の錯とさふ  
 四五の月と尺と海すの家  
 富 躬 景 良 雪 富 躬 竿 躬 景 良

ぬいものかみふ里のむく  
 麻の音 院にまつくさぬ  
 冠をも前すはのうまはち  
 うつうつとく文をまき  
 志されハ考りうまふ人あふ  
 季もせねさけし思ふ故の花  
 入の川門下はの花の山  
 こきもまもあつ蓬生のの  
 雪 良 富 景 躬 富 良 雪

おまの香たふし破故帳  
 としめしうまの巻の巻  
 風流  
 翁























芳とゆひする大いもの此 残  
蕙の尾をこゆる花をとかさしる  
瓜紅うつる双ふの 石  
老楊すすれと火のてい入て  
杉ふ人す告る 秋 一を  
名留る舟の月了る言をれ  
破くしとさえくしてささる  
花の好もを織する 差初ら  
二 涅槃いともあま山うけの塔  
稜多村を浮舟の外の喜宿る  
刀 持する甲斐の一 札  
舟垣人と通るぬ軍ふし

水 良 翁 水 景 良 水 翁 景 水 良 景

物ふくくしひる削る松の木  
早ふかの髪ハ白髪にかさし  
集りて遊女の尾をもとむ月  
露の滴り葉ももれぬしぬる  
紫くさすりあさる後さする  
合歌吹たのけを屋のかけら  
多しししあさる万々の 証  
古の友をいし法をさする  
空の葉 編する舟の季合  
まみそれ沙走の市の名結とし  
襟 掃りのりを 夢院の窓  
元人も古ふ懐紙にかさし

景 翁 水 良 翁 水 景 良 翁 景 水 良 景



やま久鳥のまうふ入 お  
ひつてく聖とこくくお噂のむ  
山田の縁をいそふあう南

良卷水

羽尾山舎受阿闍梨のお漢南管お坊主

篇

有うくやをとめくすん少言  
任候と人の縁のえん 州  
川舟の強り屋を引いそ  
野の飛石とくすんあう三方有  
澄まう天をうくす秋のうれ  
おも南と碇うちうく  
候くそハ管のかけ定まう管統す

露丸  
曹良  
約雪  
殊妙  
梨水  
雪

百里社 旅をと本まうの牛追  
山合くすうく珠の縁をまむ  
斧 おすくく心林木の森  
喬よみお徳志う山の家うく  
豆くくぬ萩ハ何と 怪  
古師おを寺すうくく松皮葛  
多うく 之杖くさくく(の萩  
月尺くく引起されて柳き  
数所さうすうくすまの香  
中めくくくかかすう花折  
的場の事すく味うんふふ  
まを縁く七のくく力石

箱丸良  
雪丸良  
水丸良  
箱丸良  
雪丸良  
箱丸良



汲るいづくく醒る舟のぬ  
足曳のこころをゆくはわらふ  
敵の門子二取の病をゆく  
かよ清の雨を空舟の地をゆく  
妻乞やうる可山やの春  
し中室ハ極の枯木の上をゆく  
湯の多きくくもく釣の味も  
龍の音を枯木の上をゆく  
藤玉をゆく取すのゆくは  
月山の嵐の風を骨を志む  
海浜、大浜より福島の影  
あそびのひん様をゆく心た

丸 水 良 入 壺 丸 水 翁 丸 良 圓 入 丸

鳴るやわくろく氏藤のとも  
ぬき人手持はるる妹の身をほて  
新と片のぬ并くの津  
鰯のさうる流る花の波  
常打打あくるこまの春

水 會 良 翁 丸

智子重行亭

取くしや山をわの初花子  
野子存れ春をゆく舟戸  
絹織の帯のそりく格歩  
閑涼生れ末の三日月  
春あかりあうる梨の花

重行 曾良 昌丸 行



珠千小峰と付  
山の珠千清之り帆玉船  
藤ふみや里ハくちとく  
栗稗とり毎の齋と喰飽く  
うのらうく紙折る石の戸  
赤櫻と母の記念の極をくれ  
雀千駒さう小田の折紙  
此秋の川の極積くつとく  
教えくちもたてはくくく月  
きぬくハ松さく同くちの鐘  
たの女は娘さ物可け  
智入の花さくさくおもたて

丸九翁 丸九翁 丸九翁 丸九翁 丸九翁

二  
もくの廊ハ柳千焼ける  
巻記の巻も一巻千焼ける  
奈良の物千豆麩さめる  
はくち先あされとや巻揚て  
翁をさくくはけくひさし  
さくけさ八国を伝くく筑盛船  
奈くく千友を付さく  
おりの虎も陸もか松系  
皆牛のかくも踏つたさく  
おの蟻の所かくと巻や巻つた  
さくけくさくけくさくさく  
のさくく月もは柳のさくさく

丸九翁 丸九翁 丸九翁 丸九翁 丸九翁



江泉のそふく陸奥の秋風  
初原の頃よりさよ水のためし  
山をふ化つ言の暮智  
尼名男千まきくこらふし  
ゆきかふくおふた種橋  
花の樹をよやくみ味ふる  
野々々々々々々々々々々々

良玉 丸行 良丸 翁

酒田不玉亭袖浦に上

河川と山や火海のけく又源  
海松かゝる夜もさむ枕迄  
月の上関原をかゝん海松

翁

不玉 曾良

民のかやせのりく秋風  
志しきほくはやくる色柏  
河の流の玉をさくふ葉の毛  
夕陽の影のたよりあめさく  
火を替りけく白髪ゆれはく  
海をへらちるふやせきくせはめ  
松あさおくる武隈の古木  
雪杖のりききききききき  
ちきこの飛く新らかひこ  
お供してゆきふ家と見ゆん  
はきのみもみすのり入  
初原のふ葉帯寺の流のため

良玉 翁 良玉 翁 良玉 翁 良玉 翁







あまのきさる 桐の一本  
あまのきさる 食くらふとくまをけり  
海寺の小舟をさき上り 夜  
静けし ちり山をさき上り  
おの末下り けり けり  
夕あらし けり けり けり  
雪とくま けり けり  
さぬけの場を起し けり  
数し けり けり けり  
後 けり けり けり  
ゆらり けり けり けり

左葉 曾良 眠跡 此竹 布雲 石管 執事 良 義年 葉

麻引く ちり けり けり  
堪あす けり けり けり  
ゆらり 二人の山本の純  
花の冷き けり けり けり  
樟の羽を けり けり けり  
まゆを けり けり けり  
色を けり けり けり

を 酔 桑 手 聖 翁 良

星々 けり けり けり  
いろ けり けり けり  
瀑 けり けり けり

石雪 曾良 翁



此百十句ありし

秋風おくる父の松から  
かのまを跡手つてに拾ふ  
跪し續く玉此古壺  
舞榭も小枝もむのまを流し  
角のゆくりはれハ長 葉あり  
庭をひく雪をまわしき雪の上  
一むく鳥人多たてし鳥  
雪山や総て小砂を拾ふ  
科の却りもま由花の流  
夏てこの百そと魚の身を流す  
人びとくしき寺の香の

良翁也右雪翁良也石雪翁

松柏あはれ風れまきし  
子を耐さをくつ 粒の床  
清り老の杖をぬかり 硯の  
昔の月山子 向ふし  
捨皮むく老の杖は秋空く  
志を流し家此はな生秋空  
塔の孤村のまきしや  
清りあめあり九半 清りしき  
かきあし地蔵の孫石の  
強くふありふ里のまき  
仇能もあし老の寝手入  
身木をまきく松の産生

良翁也右雪翁良也右雪翁



志原くくく名や少松吹居花  
花を足わて新くくく月  
踊るききいき秋の鼓をくむ  
くくの踊戸をくくぬくくれ  
くくくや之新をくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
信あふき破くくくくくく  
雨くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
乞食起くくく物くくくく  
蜻のゆふてハ望くくくく

菊  
被墾  
如枝  
谷ト  
志生  
志掃  
夕布  
教益  
親生  
曾良  
枝

くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
侍のくくくくくくくく  
そくくくくくくくく  
洞くくくくくくくく  
波くくくくくくくく  
物くくくくくくくく  
布くくくくくくくく  
林くくくくくくくく  
めくくくくくくくく  
去くくくくくくくく

ト  
枝  
墾  
親  
市  
生  
良  
枝



かゝらとてうゝに性ありあふ  
一持子折れぬおむ三りの月  
秋のあまきく糸眉のひろ  
宿あきのうし八の袖のさみやく  
あしきよきさくさく虫くく尺む  
まされ子志のふれこぬ極中をに  
身こさくひし佛おの板あ  
改改もつとあえやしなつ  
定泊のさみれは仕方ゆき  
園ゆし五の虫いされらるる  
あしきさくしこのはしをけりも  
大うこは折らるるまきしけり

市翁塙生ト親翁枝良塙親翁

庭うゝ尺ゆき町の志し  
風送る被りて涼しやれ  
若衣もも子女ともりふ  
古ふ又子のあしきもあしき  
あけの情子哥やあしきむ  
あしきうもかきくあしき捨写し  
あしきうもあしきしてあしきを友  
あしきのあしきもあしきあしき  
あしきあしきくあしきあしき山

市ト親翁枝良塙親翁

あしき庭うゝ  
跡は若きまての料理も瓜茄子

翁



みーのさままゝふ秋の夕紅影  
月ももゆく地のまゝ了次く  
すき可さひーき村れ生垣  
秋後治の門をまゝて植のち  
小桶の清も枯ふゆき  
セツトウヒとあうしと嫂の恩  
るよふーやう西のちる系  
よみ羽ふふあうをめり地  
ともー清もハやうやう月  
風さふく候ーしとさうし  
村のり立木干干あう編  
ふいけかハさうあま中と縁理て

一泉  
左任  
ノ松  
竹玄  
終子  
雪口  
乙州  
如柳  
北枝  
菅良  
流志  
泉

さーめやゆゆるみれさうひめ  
糸うしと箱甲系ぬよ急名  
阿ーも踏へお走山のや  
子の戸は花ももしと種ええ  
柳少ーもーしとていく妻

扇  
枝  
口  
浪生  
良

七月廿六日觀生亭

めれたゆ〜人お〜や白の蘇  
花かられ〜す〜た〜た〜く〜家  
肉〜〜と〜漁〜も〜あ〜す〜船〜あ〜け〜  
干ぬか〜〜の〜を〜ま〜ら〜〜の〜  
おのり〜屋〜宿〜の〜音〜の〜か〜ん〜受〜ぬ

観生  
菅良  
北枝  
生



常あしくくつた女一は花  
夕と結ぶる傷本の噂は出あふ  
戸子持をて替ふ酒樽  
切の雨の古や置もらまれら  
是の地を舞子枕所くともや  
晩清の船のちうと鳴り中を  
高をもすむる守樂の船  
肌のみぬ女のかちうとまを  
ぬめうと結く糸うつる糸  
よまうら木より鳴かす襟の  
うみあへ上る境のまうは  
あやけの所の枝も只四本

菊 良 枝 菊 生 枝 良 生 菊 良 枝 菊

おちかきゆの岸のあまうか  
ねもすうとまをの唾ぬあふ  
むうしを走る月の歩陵  
あうら花子米鶴里らうと  
解る菊そまらぬう  
二 枝の羽や赤ふ程うねうら  
くの上うと投るさうら  
ひさき市木魚子心角折る  
目鏡して見ますみ海月  
是の片とぬま人の名は跡の  
志うまみくらす石の白穂  
神社の櫓の露生のいくうら

生 枝 良 生 菊 良 枝 菊 生 枝 良 生







ちうくも枯く霞の秋子  
渡し香編る丘の月うけ  
志付し位くお座しき入る  
海音に多き雪お傘さし  
ひそく手ひくく大手の梅  
きまや二のまのこし謀の心  
音つる油隙とらあし  
初冬手多まきともあし  
吾手つりあれて信のあつた  
提灯を湯女とあけけり  
玉子貫ふくあつる山もと  
柴の戸ハ納豆とくは教し

亨子  
被瑳  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁

初冬あつる竹編る  
翁長手人ハ二十子みくぬ  
よきて舟のうり月ハ川  
福村おぬ芦屋ハちとあつる  
古手の軍の骨ハ白 暴  
やふ入の嫁や送るむまの  
あまみほひの髪はふし  
うつくしき佛を湯子  
はりくかちし一團甚の仕合  
そつて手の餅揚げし  
きひくあつるあまの古里  
あつるとあつるあまの古

翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁  
翁



今利を鳴りしる陵の坊  
竹のわき割し笑の思ねえ  
本家の早苗もよ百姓  
那の力周なる赤子をゆき  
付ぬ敵の語回ハき秋  
良きくけハ流石の舟り  
守の館もし着かりて花  
十重二十重もけりけり  
秋葉一葉もけりける里人  
旭の光もてまきまき  
残光の報費くらふ作垣

子 子 子 子 子 子 子 子

山中の温泉

うらうらと蒸ゆゆく  
花の山ゆく  
月とと角力と  
霧くく  
青い  
空か  
山  
寺  
ひ  
し  
お

北枝

良枝 良枝 良枝 良枝 良枝 良枝 良枝 良枝



先細の髪を傳へしる門  
玉ののち上望かぐく  
高からくく物猶もろ竹  
秋風をものいふ子と伝ふ  
きりき枝のほく華礼  
花のまの古ふおの町  
まを跡さるる玄何の等  
長きや志はるる難波の貝  
浪の小溜りおしり芹枝  
多枝子志と柳の枝あさ  
くつくくく枝と眠く霞  
鏡小油蒸ものうまの古

菟枝 菟枝 菟枝 菟枝 菟枝 菟枝 菟枝

非菟人さる人お菟  
明ふの基りたも淋さ  
ゆき枝り他り三り力  
初者心字の枝りけり  
小畑とちりけり伊  
飛瘡ハ素高り永も  
向くれくもく枝肥は  
向ふは仙女の姿を  
あうのを志はるる  
仲経る字はのり  
寺り使をまきり  
持持て遊ん花の

菟枝 菟枝 菟枝 菟枝 菟枝 菟枝 菟枝



疎狂人と保生うれゆく

執筆

九月八日小却し所の書信

路通

一とてはありて尺あるは秋の秋うらむ  
むししの従ふ病をも尋縁か下  
紙子もふふ又あつてに内冷て  
あつてしにともさむ世のこころ  
植木屋の植木子料を伝すもむ  
舎のすくすくぬすハおれしに  
乳従く人々こころさるる夕下  
兜さるるのくす村のさるるさ  
恙のさるる子海し破れ髪に庭

曇夕  
白之  
浅夜  
霜  
曾良  
夕  
通  
良

ほそくふあつてしにぬふそあつて入  
秋のさるる秋のさるる秋のさるる  
月見のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる  
地獄のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる  
秋のさるるさるる秋のさるる  
豆敷のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる  
さるるの秋のさるるさるる秋のさるる

本因  
秋  
之  
翁  
通  
因  
秋  
之  
翁  
夕  
良  
秋







アア  
アア  
アア  
アア  
アア

己もやあやまきりむものぬ  
いもよふ人のあま引さあそ  
叙君の面をわさうけり後  
すのうらの鐘をわさき思ひし  
業よめぬ月のかみし  
花をよして結きくころ昔はれ  
細代の能く我市のあまはり  
舟の形をよきうけかきく  
上落くらしも松のまのまに  
花のま吹雪のま松のまに  
ぬきまそそそく岨の山よ

知風  
知  
知  
知  
知  
知  
知  
知

とやと吹ぬまを言の菊  
こころよふ山音月のあ  
新をよけ去年の朝のあま  
をよきく山のかきあま  
酒飲の梅子孫子をめさる  
物わししくと文をよき  
足のうらむけをよき  
事をもつれてよき  
二人のあま心やあま  
けつり 鱧子 精進つす  
兎角 一とあまをよき

菊  
左柳  
路通  
文鳥  
越人  
知行  
荊口  
此筋  
木因  
銭香  
曾良











いよてしやけし 奥州の 家  
昔生し 奥の 幸初は けし けし  
林とら さまり けし けし けし  
室の 母と 別見ハ 安ふ 流の けし  
凡遊仕上 けし けし けし  
寺の中ハ 操廻う けし けし  
よや石 けし けし けし  
臨陽燈ハ 月を けし けし  
停の けし けし けし  
をみ けし けし けし  
鬼う けし けし けし  
せれ けし けし けし

不 風 菊 室 流 跡 不 菊 芳 風 菫 不

白 髪 けし けし けし  
古 義 長 の けし けし けし  
あ の けし けし けし

菫 跡 芳

皎 や けし けし けし  
けし けし けし  
暦 けし けし けし  
か けし けし けし  
秋 けし けし けし  
扇 の けし けし けし  
ま けし けし けし

菫 風 菊 室 流 跡 不 菊 芳 風 菫 不  
菫 風 菊 室 流 跡 不 菊 芳 風 菫 不



玉子  
坊のまじり

初かみあまの将監り 義  
うの籠よりとるお糧也  
おらをもとあまの良き糧の  
伊勢の海よりこれ素禰をあつた  
かこたのそを贈る古  
村人の罪の罰らうらあ  
鶴江門流をそりりり  
造りあうと海も甘けり  
月もあまの良きあま  
妹うや海を納るの生  
あまのまらうすうの  
そはしよの衣おを授け

木白 配力 麦 風 芳 子 孫 力 体 麦 扇

かーうけらる 饅頭 の 年  
此 ちや 餅 も の ちよとて  
肩子 持ぬ 付 の き  
餅を 男 一 尺 を 心 里 か  
さう 終て 火 の 法 を せ  
華 紀 子 志 保 した の 志  
女 嘆 する 休 の 戸 の 内  
存 貯 の け の こ 餅 を 籠  
宵 中 ハ 志 保 した の 志  
志 保 した の 志 保 した  
志 保 した の 志 保 した  
志 保 した の 志 保 した

白 力 款 白 翁 芳 不 麦 風 款 白 芳



ふるくもろりーや踏、徒心  
七より憂をかーるほふさ  
なうーてをを所きまを相  
柿の木北枝ももくこまを打て  
飛てすきさーくやわぬ紫を  
ゆり老の踏およりひらるゆ傳ひ  
小斗の星をてつるむ村を  
庭の瓜向ううてをくゆつん  
松ハ一本山の神  
乞食ーくちをすく藤すれ  
強子くしぬるこま心くまふ  
まゆりわらしし陵の地くく

力 芳 翁 風 疎 白 款 共 麦 翁 風 疎

くくぬ方此歌ををてつる  
此法を火を替りゆふひくく  
なぬーく未て強説の名を向  
引うのく芳翁の語子まはけ  
月の夜を拭てもくふ又芳  
月の夜をうみー飛と美ーは  
きぬてあしをのりさうひ

力 翁 風 芳 白 不 麦

あふ今ゆくや小斗の星のた  
満の芳ゆあつあつたの橋  
一つづい智の本をうゆかふう

百歳  
式之  
翁



百とく〜千新し田圃さ〜けし  
 聖の月をとり〜とらん草の月  
 統おし強ふ家のおん  
 芳原のす〜れの中れ大〜ひ  
 素良の小称直もあ〜らりし  
 提灯も地を〜しひし陸の芳  
 残子羽おを〜か〜みほりさ  
 浦く〜を〜る〜人〜物さ〜  
 古ふ名は〜のなを〜〜  
 三向の釣を〜〜甜をか〜  
 志の〜〜〜青山の秋  
 子習の衣を〜〜打を〜

菅牛 村鼓 槻市 梅歌 牛 翁 案 市 鼓 翁

瓶子う〜そ〜く〜む〜ま〜  
 杖意〜上〜杖ハ坊〜若〜の坊  
 虫ゆ〜〜〜う〜け〜久〜急〜  
 去の末〜猿子小唄を蘇さ〜  
 みすの屏風〜画〜扇柳子  
 伴〜お〜か〜〜〜か〜扇  
 夜更の〜〜〜風〜〜  
 ち〜〜〜あ〜〜さ〜め〜言〜れ〜さ〜  
 柴〜〜の市は帰〜酒買〜  
 ゆ〜の障子の月〜と〜花〜  
 福妻〜舟〜ふ〜習〜ふ〜〜〜

被〜市被〜牛翁 鼓 案 鼓 市 鼓 翁



家子満くわきもの  
子供おつ侍りあをりついで  
子木のひつりついで  
物衣の下知の意解をぬけ  
帯をまわねはらぬ若き  
誂れつとふも赤の屋あれや  
相お法りもゆる場  
初まの耐坊やゆむら提  
控りけりつとて一

被案市く弱新く弱案

くく風きぬぬさうい程

玄印

虎首ぬおけあうくみ  
十島舞も凡あ米の原  
くくめりあふ旅ゆい  
くふの月雪のものハ山の  
よれ岩胆子秋のな  
一株の老ハ物手細ら  
人足ぬハ丁了事の後  
片花ハ志もふと破も  
右もいも唯造り  
尾上りつう後つと  
東玉のめり男もは

舟竹 弱 牛 印 竹 印 牛 印 牛 印



写戸の月を待しのつる  
秋風千木疎烈息も吹きり  
垂ふふ立あけ方か陶  
花きりう志賀の田の雨きり  
ふりおろれりむむまら  
まのりを長柄の傘の紐の  
縷斗りを付しりか  
白粉こふ代をや屏の鏡  
珠よむ業をきりりす  
風とぬ手ぬる火のりけ  
おを引しり梅の片きり

竹翁 竹翁 竹翁 竹翁 竹翁 竹翁 竹翁 竹翁

自花をある枝の色を  
嘘のかきりりあを今

落沾 翁

首末もや言久の  
木下をも祝く

翁 曾良

さきかみらら  
茅屋を言作り  
すの川こふあ  
つる

桃雪

雨と終し葉の赤は



夕念ふ小娘の糸の月おと  
秋をよこしと布多うと  
曾良

あさう此酒を飲まれ侍らへ  
酒うもしりも何れか入る  
等好

秋やうも又うもいふか川  
市の子供とまうとつ  
曾良

田植のまゝうとつめあけぬ  
外とつしちかきも侍らへ

松名早苗うつむ食乞む  
いふの女熱やゆえおすれ  
等好

風流年とし

あのかく物室あつ柳  
ひつろふいひの橋のふを  
風流  
曾良

盛修亭とし

風のあくと南うらうも  
小家の軒を流ふ白雨  
柳風



物もろく禁ハ違方子埋行し 木端

六月十五日青島函書

涼しき海へ入らるるみ川

月をゆりあす浪の浮海松

黒野の森ゆるたのむ時

ぬもとの海へあつむき

波とらのあかたけし市を待

新しきあつむき青の油火

不様娘のこころを忘る

このよれよれとむしむし山の上

菊

令道

不玉

定連

曾良

任曉

扇風

會光

杉の葉ももろく之の月 菊

夜休みのまをのりも勢 不玉

以り跪ゆるまのり 曾良

菜欄子もろくは花ももろく 菊

菜のすしれを揚りけら 棟雪

娘もろくは花もろくは 更也

万のりめけし言葉の 曾良

菊を一花とめし

ふゆやしの月終るる秋の 小春

物もろく月花の底さし 菊

玉長  
下  
下



初花の山あ。方ねえけし  
にさうりくさう水のき魚  
物さへ扇引さくさの枝  
吹よさき方うきほひむら  
木因 翁 小枝

送子  
秋のうたはり先しゆの宮  
義のうたやうき秋の風  
吹くくとたつれきと秋の風  
吹縮の質おきくみゆる  
木因 翁 光清

元禄三庚午  
二月の五日

古井の燈さき入  
湯のうたはり先しゆの宮  
指さす方うき月ひらむ  
梢さく陳の枝をかきさく  
香を吹け風のゆきさ  
鏡しにさうりくさう水の  
母さき去あしゆのき  
吹くくとたつれきと秋の風  
吹縮の質おきくみゆる  
木因 翁 光清

四十四







けりちりあはる 智恩院のこ  
まき河の杖 きりきりきりまのま  
水子 しくま 花のま 子

壺之相

木のまに汁と 餘と 梅可ふ

菊

西のま 子手 能て 子あふ

珠碩  
水

松人のま しくま 子あふ 子あふ

くはくは しくま 左刀のひびく

月あはして 糸の 内裡の 司る

物 白つ しくま ね、 子あふ 子あふ

菊  
水

片まき しくま 子あふ 子あふ

入 込子 流の 海流の 子あふ

中 子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

物 子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

内 尺の 子あふ 子あふ 子あふ

秋 風の 子あふ 子あふ 子あふ

子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

子あふ 子あふ 子あふ 子あふ

菊 水 菊 水 菊 水 菊 水 菊 水 菊 水



又さ何れぬらきく  
くすみのうらみ  
懸り尺とよと後  
手朱子紀の事  
証して元く  
又六の同を  
仮の持  
中（に  
余若ハ  
みかれ  
月  
花す

水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶

只四方あり  
一葉の  
醫者  
花咲ハ  
此

水 瓶 水 瓶

木のも  
の  
蝶  
あ  
多

霜 風 良 去 雷  
洞



精のふくむる最の種の家  
石櫃の蜂目とてしむ昔の家  
魚よりぬれしる鮎ゆき竹  
お宿の志ししやとおもふ  
木幡のしるしのまのまらぬ  
青鹿とてんきふ人のしらぬ  
井戸のさかふらひき切  
清しきの得のまらぬ月を  
むしりをはしにたしむる  
病しめるのまらぬ女の尾を  
舟よりえらるる船母子の  
かんちりねにけりしる花さく

半渡 芳 麦 翁 不 洞 翁 麦 芳 不 麦 翁

二の 水がわたり二の 露 さけ  
陽のぬるきに揚をひふす  
すけふくせぬのまらぬ  
そのふねの鳩の首の楊の  
ひとくのまらぬ  
鮎ゆき竹のまらぬ  
まに新しふまらぬ  
佛のつるのまらぬ  
ほやをさくまらぬ  
ひらまらぬのまらぬ  
まらぬのまらぬ  
夕月を扇に結く秋の風

三箇 翁 不 洞 翁 麦 芳 不 麦 翁



春の介し人へのあし  
きく菊のちの骨と名をつけし  
能くしゆゆんか和よけ色ハ  
9入る二葉の菊を挿さしり  
彌さきくあしぬ志のあ  
海くつ花を流るるれすや  
きしやうハく家なしき

芳 麦 不 卷 旧 跡 芳

伊賀の山中

鐘聲や花のさしに空あり  
火焼くあしけハ風くく  
酒母のあしつる花をさしけ

出 芳 半 跡 局

秋のくくく草のあし  
まゆの七つ起あし果地  
ひさこの札を付しき  
秋風は枯の戸らるる縁入る  
小傳のくさしけくくす  
安(と美洲の河系めから流る  
あかしの抄子とつ川のくさ  
多秋の男もくく三輪廻  
人くくくくくく名はけし  
萱州の色をかくくぬ色を  
秋之際此時死くく  
内きく石家宿くくく知の方

良 不 跡 局 不 芳 菊 跡 不 芳 跡 不 菊 跡 不







せえて清き草の香 燈  
初月の影長繁りたういし  
石子いししれあひくし  
松の本を秋風さそよおし  
礎もやしし翠の息よは  
しれらるる女もあはしを待  
久敷う籠のうらるる恋こ  
古塚の古川のあを控うら  
柿の葉らるる重かまし  
ちこちぬきふらあしわら  
うきききれあは清あわくさ  
露ふくちる月をこける月二

奇香 尚白 自咲 通霄 松洞 玉 翁 吟 玉 宣者 白 洞

枝を枯るる昔 笠の家  
いあつらつら対し社おもれ  
よこしつられあひの汗そふら  
花をさそし芽かへるるうら  
あつらつらつらつらつら  
麦あつらつらつらつらつら  
されらるるわらわらつらつら  
燈火のうらつらつらつら  
あつらつらつらつらつら  
花のうらつらつらつらつら  
おとつらつらつらつらつら  
中の秋のうらつらつらつら

江山 翁 吟 玉 宣者 白 洞



三弦ちうく花を踏を  
うき人をやえといふ月あ  
大勢 幸し 花ふたえん女  
一燈や二条ゆらゆら小細  
文の字告こまゆいよ山  
ころりしとあまをさしよき  
畜をりあふし胸の 蝶  
疎おの伯父の影さうへん  
おの妹、子を産み来り  
探ししお妻の戸もあまを  
うや言くさるるの如き

白 翁 龍 島 雪 江 白 洞 考 白 島

猿蓑

市中ハ物の自らのやまの月  
見——しと門ししの  
二の月字も星も月輪も  
灰うら——くう先一枚  
此節ハ花もぐらう白菊  
只去拍子子あまをさし  
多むくまむくくくくく  
花の芽とくくくくゆりけす  
花の昔くくくくはあむ時  
花中の七尾のあハけくき  
魚の骨とくくくくくく

凡 犯  
翁 吉 来  
翁 来 翁 来 翁 来 翁 来



月夜

待人入 小御門の 露  
とて 屏風を 倚り 女子と  
ゆ 扇ハ 竹の 葉子と 心しき  
菫あじきの 実を 吹く 夕暮 露  
任 意 年々 寺々 陶の 可  
秋 成の きも 衣を 纏 秋の 月  
手 子 一斗の 地子 ころり  
又 六 本 朱 つけ ころり  
と 袋 子 ころり 思ふ ころり  
直 立 ころり 刀 持  
丁 髭 ころり 刀 持  
戸 陰 子 ころり 刀 持

末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末 紀

了 井 中 ころり 月夜  
ころり 字 體 を 記す 月夜  
月 夜 と ころり 起し 秋  
手 子 ころり 刀 持  
ゆ 扇ハ 竹の 葉子と 心しき  
菫あじきの 実を 吹く 夕暮 露  
任 意 年々 寺々 陶の 可  
秋 成の きも 衣を 纏 秋の 月  
手 子 一斗の 地子 ころり  
又 六 本 朱 つけ ころり  
と 袋 子 ころり 思ふ ころり  
直 立 ころり 刀 持  
丁 髭 ころり 刀 持  
戸 陰 子 ころり 刀 持

末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末 紀







娘の親先子所りありし一豆  
 才さしお女の習もはうあて  
 何おもひいそ 根のあく  
 夕有夜言の萱所のゆふ言  
 人ともすはたし 何うもふのあ  
 うそつあ子自惚いそておん  
 又も大るのれ飲をさあす  
 堤うう田のまやきしひまふ記  
 加茂の社ハ能や——らじ  
 物うまの屋をうきくたのうけ  
 雨のやううのやあ 迅 速  
 金帳る書流のめれ号とさき

菊 水 末 菊 水 末 菊 水 末 菊 水 末 菊 水 末 菊 水 末

去うらうら（あき共言の舞うん  
 糸 極 後 一 太の年 娘手うう）  
 喜ハ三月 何けあの 心

水 末 水

那陽菜

秋きて干瓜うき 南言さる  
 貴居ふりえて戸をさうす月  
 早稲穂をすううはあは月あれし  
 人ご—アうう 出の故い  
 猪 柵もさひく 尺ゆう田ん松  
 虎 骨 けいふと—しこのうらな  
 春 提し舟のこけらと捨らん

珠 頂 之 道 昌 房 正 秀 探 志 碩



たぐいぬ 阪の 安も たりぬ 以  
す 急き 下 難 炊 時 の 万 景  
非 可 悔 娘 可 少 油 走  
う け 玉 合 明 の 常 止 止  
肌 寒 一 と 情 愛 何 何  
内 の お 海 へ せ 所 き を 喝 餅  
業 を 餅 多 寺 の 庭 又  
上 張 子 難 ぬ ぬ 白 の け  
ぬ 和 子 ぬ ぬ 雲 の 朝 ぬ  
と 一 と 橋 板 ぬ ぬ ち ぎ ぬ  
花 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

志 是 頑 肩 質 志 系 頑 是 系 所 是

羽 折 橋 の 情 あり ぬ  
行 け ぬ 起 習 子 五 六 日  
業 を や せ ぬ ぬ ぬ ぬ 味  
母 親 の 体 之 て 尺 寸 嫁 入 ぬ 志  
之 子 一 一 ぬ ぬ 山 伏  
ほ 戸 店 を 持 ち 在 ぬ の 門 橋  
妻 を 志 ぬ ぬ 咽 の か ぬ ぬ  
奴 引 の 可 ぬ ぬ ぬ ぬ 結 し  
骨 の 小 向 子 志 ぬ ぬ ぬ ぬ  
志 ぬ ぬ と か ぬ ぬ 行 ぬ ぬ ぬ ぬ  
こ ぬ ぬ を 告 ぬ ぬ 秋 の ぬ ぬ  
山 畑 の 木 疎 色 一 風 ぬ ぬ

扇 肩 系 扇 志 是 頑 質 系 扇 是 扇



石垣の坂を帰つてや坊  
情強ふ聲の太工歌いし  
あつたを跡よりあ段の借上  
那の度と兼しあを柱立てけ  
かゝしとすらすまのゆけをの

碩 角 肩 是 碩

月足すつてやうなまきねえれし  
庭の柳の葉うのむしあは  
火桶ぬる直のまはれをまひ  
ふあつとの、古ふ枝折末  
尻張のめしとさうさる塔小鯛

尚白 菊

百たふさ見し川の上  
字の裏とすのう人ふふ美ゆき  
雨のくもりと色故痛きをぬ  
一切らふられて跡の市の手  
とくひくくまはれはけくおこ  
いそくくと流しとくさる油筒  
あふとふさねてとるれ塔つ  
月のあおだきえてとるふなまの  
桔梗かろうやねすくくけ法  
侍者やあはまきと秋と舞て  
大工の扱をいのあ辻字  
三々の積ふと積ふ花ささく

白 菊 白 菊 白 菊 白 菊 白 菊







玉  
不  
...

かり接し... かの... 河... 麦... 齋... 願... と... 久... 山... か... 月... 船... 物...

弱 是 弱 是 弱 是 弱 是 弱 是 弱

又... 時... 昼...

弱 是 弱

あ... 舟... の... と... 珠... 赤...

弱 是 弱 是 弱 是 弱 是 弱 是 弱



石のちりばの昔 けしよむ  
影朝の暮を足しけりききひひ  
ふす月 けりししむれ時向り  
拍子木子物ふはのちつた  
流るる石のり 答の 大 休  
月影子りけり 墨の 向の上  
只ちりししときりしす  
秋のふはるる秋をあらう  
紫の白髪をとりけりし  
手しりしむるる 友の歌  
きりしりしむるる 友の歌  
きの葉のいハ 芥と 吹 音

楚江 勝重 葦香 鬼苓 正秀 別 重氏 重古 菊 子 則 晴

さしわくしりしりききあうし  
あけきつみさうらハ戸をけりし  
ひりしりしりしりしりしりし  
けりしりしりしりしりしりし  
せえりしりしりしりしりしりし  
風止りしりしりしりしりしりし  
只一りしりしりしりしりしりし  
けりしりしりしりしりしりしりし  
月尺をゆしりしりしりしりし  
秋風子細の岩焼石の電  
葉のりしりしりしりしりしりし  
支能りしりしりしりしりしりし

正幸 江 苓 画 然 成 通 葉 学 苓 晴 通



あはれそふた刀の及方きんよ  
長楊子詔古意を打とくさ  
時き 時し ねをのむき  
職人の不ゆいさる花のうけ  
南おもしき先らむ若草

重成  
柎沅  
糸  
弦五  
五

幸の町七殿ひね初しと行  
一吹風は本條走りのやうな  
役引の勢いめく川こして  
狸も怖す藤さくめろ  
まのく戸さきとひころの月

去来  
翁  
凡此  
史邦  
翁

人子もくねい名物の梨  
まふくる巻路おうしく秋あつて  
とねららよふせうやうのこぼ  
何のりもなきのくらの部し  
里尺しそんで午の具ふく  
わつとくさすの相若の志とく  
莫草の花のさくしとちる  
吸物をわのちまされしあか  
三里あすけおさうえけら  
ひきと慮回、男はあうし  
さし本付さる月の懸取  
若ふうしねきあうさるまの跡

末  
邦  
此  
末  
翁  
此  
翁  
末  
翁  
此  
翁  
末  
翁







破山のけり場の鳴り声  
宿し長き松のけり場の壺の音  
残まぶるくろく糖ふまの糖  
人の尺ぬ時（ハ）位物ねい  
こよういも舟子ゆり起す音  
山百千糖のさきさる枝つき  
尾張をうつす本宮の大根  
破張の蒸気はくはくしき  
可しけしうしに鳴る壺の火  
昔のうしうしあまを人を見かす  
湯のけり場のまき場の音  
赤湯を初し念する秋の音

史邦  
吉集  
野重  
子  
軟  
箱  
本  
学  
音  
箱

虫の鳴り声  
尾張を初し念する秋の音  
舟子ゆり起す音  
山百千糖のさきさる枝つき  
尾張をうつす本宮の大根  
破張の蒸気はくはくしき  
可しけしうしに鳴る壺の火  
昔のうしうしあまを人を見かす  
湯のけり場のまき場の音  
赤湯を初し念する秋の音

軟  
本  
学  
音  
箱  
本  
学  
音  
箱



沙都りみくら中まの門  
夕月をこく一見習ふ山の端  
冬は佛は名は阿まこし  
垣上は湯屋のおれ花咲く  
小室のむらきの手場かづれ  
傘をさすもまをたのむやれ  
経一はまのしる齋のり  
おもしろき神のついで  
何れもろくろあてあて

末重翁 秋子 考重 末 秋

きんしよの庭めけし降雲外

丈草

らくしきる糠の埋火  
鯨はく仲一浪をりけし  
苗栽袖の砂。苗の松  
法よりけの入り力のおまみ  
あつたおもいふ旅の怪子  
うけの心よりしるぬおな  
戸尻よりつらつら日の子  
甲富し実も梅田の丘堤  
かつた魚とさお寺の修行人  
つ子は子多難やふ二階壺  
こもる火のもる舟のふら  
岸際や洲をよるる舟の朝

去来 翁 末 鼠彈 子 彈 翁 子 末 彈 翁 末 彈 翁 末



青い木更を結ぶ積る  
踊場をかくし長更の二子  
ふさけし袖を引さく  
舟子北紫束のぬき花籠  
さく木の櫛のみほり宣  
今川の武蔵を敷く流初  
流し多きする吏の石面  
張籠り五百さく北束の流  
さく向の櫛のあつりか  
河端の埃掃き免し火の煙  
死をこころれさる祖父の足  
舟中らの備れさくさの流

字 翁 浮 字 末 浮 翁 末 字 翁 浮 字

内裏の帳入り牛の子  
萩垣の川をさくし原の末  
さくものゆふ秋を末さく  
傘取やこほりもあふ月  
柳灯さくく切の狂  
堀かゝの店子に。店の先  
肥て音味よふ取の扇安  
ひく子北かきさく紫籠り  
ゆきもゆふぬ醫者の糸物  
花咲く軒端のさくさ翁  
他のさくし凡中の屋む

浮 翁 末 字 翁 浮 字 末 浮 翁 末 字 翁 浮 字



沙天翁由京樹丸無以

半りそ形も友も手わす能  
あつり去民の何物納  
あつり世のあけ京朝争  
やりの取もるおもかちの  
お中しつるあし月ゆ人  
秋つつあおまらひの秋  
官入よや京朝の子回希  
里ちのくある百の所  
お一割しあつるあつる餅  
奉加しあつる倍のそ  
あつり川や岸屋の去もあつる

示石 元来 京契 乙州 史邦 玄哉 本

右とひつるも荊棘咲  
洗濯し居れ何く録の業  
猶の何くもあつるあつる  
あつる上つる下つる物お  
あつるあつる張の縷あつる  
あつる幾人あつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつる

好春 石翁 九州 丸 末 船 船 丸 翁



おきえらう——とせよ——  
新なる世より佳きものを引取——  
禁の甲おとて——急——き  
首とくまをくくくくおはれ物  
形中——けり珠のま——け  
月海く少雨くぬくく名地花  
春とあつては弟芽枝してふ  
花も子と世をまふ家建て  
後のおもえりくくくくの新  
後くもちひくくくくくく  
ふえこの取の風くくくく  
古白くくくくくくくく

末節石喜物代石末丸

かきくくくくくくくくくく

物

いろくくくくくくくくくく

弥碩

くくくくくくくくくく

踏道

花かきくくくくくくくく

園女

あふくくくくくくくくく

翁

乙州



月代や藤のしをを置宵のや  
萩去くけしるいしり於  
篇

桿杖や鞠のうられぬわ  
秋丸く風手尋ふし門  
之道  
篇

赤人とも一しの酒探煙  
去忘くさふら茶の振  
篇  
珠碩

元禄四年末

名仰えたる百をさよふて  
壺のわろめりけく軍直  
わ猫子神良猫通ふ事  
ほしきれさるきぬ張の月  
物ふらするぬ糸瓜のわ  
仁といふれさ後了志  
聲入り茶を愛むぬの  
志し古今の跡る奥筋  
歌しき茶を付て先ゆむ  
歌し神のしきしん  
此里手お傳へしる布は  
篇  
通筋  
篇  
玉  
執筆  
小川  
此筋  
綫香  
篇  
珠通







うらひすきふきうらひの歌

色

猿蓑

梅屋蓑すうらの木のしらけ  
空海くくくくくくくくくくくく  
空を渡る山を去る梅屋蓑のや  
志とふいふふくくくくくくくく  
片陽を空をうえて空の月  
二階の窓はくくくくくくくく  
秋  
夜やう露の粒を足くくくくく  
縮の葉のひのちのくくくくく  
霞んのけしめくくくくくくく

蜀 乙州 弥原 素男 州 蜀 蜀 蜀

由花改くと呼あうくくく  
おの刻の箕ふくくくくくく  
すみきくくくくくくくくく  
花のれくくくくくくくくく  
雀くくくくくくくくくくく  
懐くくくくくくくくくくく  
ゆきくくくくくくくくくく  
捨の柄くくくくくくくくく  
原くくくくくくくくくくく

州 蜀 蜀 蜀 蜀 蜀 蜀

衣蓑くくくくくくくくく

曾良



うらひすきふきうらひの歌 魚

猿蓑

梅屋蓑すうらの木のしらけ  
望海くくくくくくくくくくく  
雪を待たず少雨も去ればあけや  
志とふいふふくくくくくくく  
片陽を雲がうらえて雪の月  
二階の窓はくくくくくくく 秋  
板やう勢の法をくくくくくく  
端の葉のひのちのくくくくくく  
農人のけくくくくくくくくく

蜀 乙州 弥碩 素男 州 蜀 碩 男 蜀

梅屋蓑すうらの木のしらけ  
望海くくくくくくくくくくく  
雪を待たず少雨も去ればあけや  
志とふいふふくくくくくくく  
片陽を雲がうらえて雪の月  
二階の窓はくくくくくくく 秋  
板やう勢の法をくくくくくく  
端の葉のひのちのくくくくくく  
農人のけくくくくくくくくく

州 碩 男 蜀 州 蜀 碩 男 蜀

えききくくくくくくくくくく

曾良











三々物ねらひしき世一人  
 以ををいんといれはとまうま  
 折経し陶の中の戸の山屋  
 松千目をさすはの夕月夜  
 面のきりしき音の  
 火を替ハ岩の洞もを  
 必を半千跡は明  
 おとろ子父の白髪を青くけ  
 折千のきりしき音の細物  
 入さし改まる芥のちのれく  
 何々何やまの

山翁 山通翁 良通良翁 山翁

御信宗

曉きぬぬや初秋の夕暮り外  
 葛もろく吹かすひくひの波  
 小村をまきぬぬ暮れかけ折々  
 駒しきまきぬぬ魚の跡  
 一通りみまぬぬくもるお月子  
 出まろく(と宵中折する  
 歩のしきぬぬ人をも思ひうの  
 多まぬぬひきぬぬ  
 物干のさう折るうて危け色  
 九折くぬぬ案の小者  
 夕可ぬぬ松管音して立物

野童 翁 踏通 史邦 丈草 通 翁 重 翁 通 翁 通

美



こゝ物わらひしき世一人  
以ををいんとせれはとまうま  
折れて陶の中の戸の沙塵  
梳き目をさすほのま月夜  
面のをうしき音の  
火を替ハ岩の洞もみ籠り  
心をまき子跡は明  
おとろふ父の白髪をきりけり  
折子のをさる字の初物  
入さし改まらる芥子のちの元く  
何々やうまの

山翁 山通翁 長通長翁 山翁

御信集

鴨子とゆえや初秋の夕暮り外  
葛もろく吹かすひの波  
小枝もさしぬるぬる林かけ折て  
釣しとまらる魚の跡  
一通りみそれくくるお月  
出るるくと宵中あすす  
あめしとれぬ人を思ひうの  
なまはくひちある  
物干のさうけうの危け色  
なほあしと案の小春  
夕可る松管の音しとる

野童 翁 路通 史邦 史華 通 翁 通 翁 通 翁

美



泥おかたしう子己女。きん  
石佛いりていけぬをあらう  
牛の骨し牛 他うさや  
海の法をくつてて破れく  
室の八島に寄るの所いつ  
みられくハちう力のきん  
唾の古似するころの黄鳥  
餅子の友をほしうまの南  
系少ちうに志んや花箱  
物ハ後そくちうと顔也  
疹いんざしとくちうの安さ  
行是つ拾ひて平人の古子履

翁通学翁通学翁通学翁通学

日  
辰

ゆり他くくとちうちう  
供物をくましの智の節  
畑の中子寄るの系つた  
扇れ并に懸ねの入。夕月夜  
松より懸ねのくちうかけ  
やきしけら子あかききや  
海屋の外向は並みきん  
おきちうしちうちう  
くちうの中子おちう不極  
は島と行倒そくちう  
飯苞くちう黄鳥の上  
佛ををかすのちうちう

通学翁通学翁通学翁通学







此のものを看て猶うさうに  
冷たき物新しき葉のたぐ  
麻のたぐいのたぐに在り  
わさささささささささ  
名跡も情もたぐのたぐ  
みらたぐやたぐのたぐ  
さささささささささ  
お娘の男もたぐのたぐ  
たぐのたぐにたぐのたぐ  
一振のたぐのたぐ  
淨瑠璃やぐのたぐ  
凡たぐのたぐ

肩子香扇房香子吟松たあ房翁

百々のたぐのたぐ  
後花のたぐのたぐ  
海のたぐのたぐ

江房翁

星舎集 牛部屋のたぐのたぐ  
植のたぐのたぐ  
海をたぐのたぐ  
扇のたぐのたぐ  
たぐのたぐのたぐ  
たぐのたぐのたぐ  
たぐのたぐのたぐ

正季 野童 古来 又尊 由邦 昭通 翁



遊りの樂もあむ事さ  
休らばも癒す心の息もく  
海と心奥の境いふせか  
生干き素折跡をすし  
つりも素折跡の枝  
秋をて又一とまき  
岸縁をく信者の月  
分家のあまき  
病うつし  
あつた  
相とみ  
人情

通 翁 末 字 通 翁 末 字 通 翁

春月かきし  
うねり  
約會  
硝子  
あつた  
学  
明石  
大  
あ  
ゆ  
あ  
あ

通 翁 末 字 通 翁 末 字 通 翁



































わづらひのさつらつ麗のさつらつ花さハ  
石苔すきく月をさえて一める  
見多れはは物ささふひさしよ  
木くの中をく掃すささる  
花あけのちささふささる  
海すあまささるささるの

瀑 芳 跡 蜀 不 瀑

以上四十句

元禄庚午の毛本の事とにけと能も  
さうく山のささるささるささる  
おさしハ大さ同じま廿三日ハ本ささる  
とも祖翁の作ささるささる  
西元すささるささるささる

岸と者徳とあり

うさや月しほ舞のささるささる  
雪溜 残る 細根 大 根  
人足のささるささるささる

蜀 句空 去来

芽斬しうさ二葉ささるささるの旗  
ささるささるささるささるのさ  
帽すささるささるささる  
人のほささるささるささる  
ささるささるささるささる

丈草 蜀 去来 乙州



此のうらみ定むるは良の書  
信りたつれしはささく人  
系よかんこ友のうらみ文のうらみ

松く庭もあさくは木の梢の書  
小まきりそのうらみみの書

夢のうらみやほてきつらみら  
一夜志のうらみ張の書の書

本可くうらみをと申さん一書  
四々五々の書向の書の書

初書もあさくは秋の葉の書  
多のうらみきあさく一書と

文草  
許去

露川  
の

の  
李由

規外

の

如行







